

日本学術会議
子どもの成育環境分科会（第25期第6回）
議事録

日時：令和4年1月17日(月) 18:00~19:00

場所：遠隔会議(zoom)

出席者：山中（委員長）、西田（副委員長）、相澤、浅野、伊香賀、大倉、神吉、定行、都築、湯川、吉野、水口、三輪、宮地、(敬称略)

冒頭に山中分科会委員長から、本日の議事（提言に盛り込むべき項目）について説明があり、以下のような意見・コメントが出された。

- データ収集は、従来、一部の人に支えられてきた側面がある。社会的仕組み、継続可能な仕組みになっていない。継続的な仕組みの例としては、交通事故分析がある。
- 見解に関して、はじめに、検討する背景、現状の課題を示す必要がある。子どもの事故の様々な問題を示す必要がある。最初に、重大事故の発生件数が減少していない点を示す。交通事故に関しては、システムができています。このコントラストの上で、子どもに関しても、システムを作る必要があることを指摘する方法もある。
- 提言の場合、表出主体は、学術会議本体で、分科会から出すものは「見解」になる。発出の仕方のフローが整理されているので参考にするとよい。
- 子ども家庭庁発足のタイミングなので、「見解」「提言」の発表時に、一般の人向けのシンポジウム（+学術の動向？）などもやれると良いのではないかと。
- 子どもの事故は、経産省、文科省、消費者庁、厚労省、国交省などで管轄が分断されており、司令塔が無い状態である。分断の具体例を示すのもよい。
- 個人情報保護の観点も述べる。最初からリスクを挙げておくことが必要。危険性や安全性を示す。
- 住宅の事故に関連して建築上の配慮も大事だが、虐待の問題では住まい方などのソフトの問題もある。事故による傷害予防が、数・重症の点でも大きな問題なので、事故による外傷をメインするのがよさそう。
- 対象とする子どもについて、一般的には中学生ぐらいまでを指すが、傷害予防では、未就学児（啓発では難しい年齢）がまずはターゲットではないか？ 小学校・中学校では、教育の観点も出てくる。未就学児の場合、場所は、家庭・保育所がメインとなりそう。
- 事故の種類では、古典的なもの（昔からあるもの）から、新しい製品の事故もある。ウォーターサーバー、ドラム式洗濯機など最近の製品の事例。新しい製品では新しい事故が起こる可能性がある。新しい事故が起こった際に、すぐに対策できるような仕掛けが必要。新しい製品の事例を入れると仕組みの必要性が分かりやすい。ウォーターサーバーの熱湯は便利だが、重症な熱傷も発生している。チャイルドロックをパスする子ども

もいる。最近、給水ボタンの位置を工夫した製品も出てきた。ハード、ソフト面の両面の改善が必要。

- シンポ開催の時期も検討する必要がある。進行中 vs まとまった後にやるか、どちらも可能。従来は、進行中にやって、それを反映させてまとめる流れが多い気がする。オンラインは参加者が大幅に増えている。QAも活発。未就学児関係者に対しても、オンラインでやるのはよいのではないか？ 未就学児と関係している人に発信してはどうか？ 仲間づくりの面もある。フォーカスすると集結しやすい。

最後に山中委員長から、次回の議題として、シンポジウムに向けた準備について開催したいとの説明があり、閉会となった。